

関西大学文化交渉学

ICIS NEWS LETTER

ニューズレター

CONTENTS

- 南岳百年祭開催報告
- 祝辞
- 発起人会
- 記念シンポジウム
- 記念イベント

第60回泊園記念講座

南岳百年祭

藤澤南岳没後百年記念シンポジウム

2020年10月23日(金)・10月24日(土)

【主催】関西大学東西学術研究所、泊園記念会
 【共催】大阪府、科学研究費基盤研究(B)
 【後援】関西大学アジア・オープン・リサーチセンター



藤澤南岳没後百年「南岳百年祭」の開催

泊園記念会会長 吾妻 重二

はじめに

令和2年(2020)は、藤澤南岳が亡くなってちょうど百年目にあたる。

南岳は江戸時代後期の天保13年(1842)に生まれ、昔ふうという数えて79歳という、当時としてはかなりの長寿をまっとうして大正11年(1920)に亡くなった。大隈重信・山県有朋より4歳、渋沢栄一より2歳、伊藤博文より1歳、それぞれ年下であり、新島襄より1歳、陸奥宗光より2歳、桂太郎・中江兆民より5歳、それぞれ年長である。こう見るとその生きた時代—幕末から近代へ—というものが改めてよくわかる。

南岳こそは泊園書院の黄金時代を作った立役者であった。そこで関係者とはかって「南岳百年祭」の記念行事を開くことと

したのである。

この記念行事は発起人会の開催、講演会と研究発表の実施、さらに書画展示会「藤澤南岳の書と芸術」と続いた。コロナ禍にもかかわらず、多くのご支援により先日、無事終了したところであり、まずは本学理事長・学長をはじめ発起人会の方々、講演・発表者の皆様、泊園記念会会員と関係者、そして参加して下さった多くの方々に御礼申し上げたい。

さて、発表者の方々にはそれぞれ寄稿をお願いしているので、詳細はそちらをご覧いただきたい。ここでは記念行事の趣旨や準備などにつき、主催者側として備忘のために記しておくこととする。

発起人会について

発起人会はこの記念行事の開催を広く呼びかけるために結成したものである。泊園に関係の深い方々のお名前を借りて各方面に広くアピールしようと考えてのことで、次の方々がメンバーになって下さった(敬称略、肩書は6月結成当時)。

学校法人関西大学理事長
 関西大学学長
 関西大学校友会会長
 関西大学東西学術研究所所長
 泊園記念会名誉会員
 道明寺天満宮宮司

池内 啓三
 芝井 敬司
 寺内俊太郎
 沈 国威
 肥田 晴三
 南坊城光興

齡延寺山主 藤澤家代表 石濱家代表 藤澤会会長 学校法人関西大学理事・元香川県副知事 香川県英明高等学校教諭 書論研究会会長、京都教育大学・四国大学名誉教授 一般財団法人懷徳堂記念会理事、大阪大学大学院教授 湯浅 邦弘 二松学舎大学日本漢学研究センター長、二松学舎大学教授 町 泉寿郎 咸宜園教育研究センター名誉館長 公益財団法人関西・大阪21世紀協会顧問 国際儒学連合会理事長、日本アジア共同体文化協力機構 理事長 元首相 泊園記念会名誉会長、関西大学名誉教授 泊園記念会会長、関西大学教授	富田 基弘 藤澤 一夫 松本 督 藤澤 保 川北 文雄 田山 泰三 杉村 邦彦 福田 康夫 藪田 貫 吾妻 重二
--	---

発起人会の方々には10月22日（木）、関西大学尚文館7階の特別会議室に集まっていたいただき、昼食をはさみながら百年祭の趣旨説明やリニューアルしたWEB泊園の紹介、関連資料の配布、記念写真の撮影などを行った（写真1）。このうち福田康夫氏は中国に本部を置く国際儒学連合会の理事長でもあり、吾妻が同副理事長であるところからメンバー加入を快諾くださった。所用により行事にはご欠席であったが、寄せていただいた挨拶文を翌日のシンポジウムで吾妻が代読させていただいた。

このほか記念品として作った扇子を贈呈した。扇面に南岳の字「簡而廉」（簡



（写真2）扇子

にして廉）を載せたもので、もともと本学総合図書館に蔵する扁額の文字を扇面に仕立てたものである（写真2）。この語は『書経』に見え、「つつまじやかで折り目正しい」を意味する。南岳および泊園書院のあり方にふさわしい言葉として選んだ次第である。

ついで発起人会の方々を総合図書館1階で開催していた「藤澤南岳の書と芸術」展示会にご案内した。



（写真1）発起人会記念写真

シンポジウム——講演会と研究発表

翌日の10月23日（金）、梅田キャンパス8階 KANDAI Me RISE ホールで開かれた記念シンポジウムも盛会であった。コロナ禍のため座席の間隔をとり、人数制限したが、事前予約によって「満席御礼」となり、インターネットによるオンライン視聴の申し込みも多数にのぼった。泊園記念会の藪田貫名誉会長による司会のもと、前田裕学長、寺内俊太郎校友会長の挨拶に始まり、二松学舎大学の町泉寿郎教授、本学の横山俊一郎講師、三重郷土会の井上孝榮評議員の、いずれも精細あるご講演が続いた。吾妻も話をさせていただいた。ついで本学東西学術研究所の山寺美紀子研究員による古琴の演奏、本学吟詩部OBの方々による詩吟が披露され、会を盛り上げてくださった。古琴、詩吟とも泊園書院と関係の深い事柄であって、泊園の文芸のもつ幅広さを示していただいたと思う。

オンライン配信は、事前にテストしていたおかげで順調に推移した。ごく一時的に声がやや通りにくいこともあったらしいが、音声、画像ともおおむねクリアに配信されていたようであ

る。特に画像は会場のスクリーンで見るとはっきり見えていたとのこと、また事後のアンケートもネットを通して数多く寄せられ、オンライン配信の強みを実感した次第である。

さらに24日（土）、研究発表が千里山キャンパスの以文館4階セミナースペースで行われた。本学の二階堂善弘教授の司会により、杉村邦彦、太田剛、長谷部剛、増田周子の諸先生、そして吾妻が発表した。いずれも最新の泊園研究の一端を披歴したものであり、多くの参会者を迎えるとともに、これまたオンラインによって広く配信した。

以上のシンポジウム開催にあたっては104頁にわたる予稿集を配布した（写真3）。



（写真3）予稿集表紙

「藤澤南岳の書と芸術」展示会

総合図書館1階展示室では企画展「藤澤南岳の書と芸術」を開いた。開催期間は10月15日(木)から11月21日(土)まで、展観図録『藤澤南岳の書と芸術』を全20頁カラーで刊行した(写真4)。

泊園関係の書画展示はこれまで何度か開いているが、今回は近年、泊園記念会に寄贈された新たな収蔵品19点に限って展示した(写真5)。南岳を主として黄坡、亀井南冥、五井蘭洲、そして富岡鉄斎の貴重な作品である。展観図録を会場に置いたがじきに払底したため増刷したほどであって、これまた好評を博した。



(写真4) 展観図録表紙



(写真5) 展示会

『泊園書院の人々』の刊行準備

現在、東西学術研究所では横山俊一郎講師を中心に泊園書院の門人・関係者を鋭意調査し、その略伝をまとめつつある。今回、そのうちの150人だけを選び出し『泊園書院の人々——その百五十人』(全75頁)と題して製本し、関係者に配布した。

さらにこれを整理・補訂して500余名にのぼる泊園門人の略伝を書物として出版することとなり、今回、本学の寺内俊太郎

校友会長からその出版費用のご寄付を頂戴した。このことは23日のシンポジウムでも紹介したが、この場をお借りして、そのご厚意に改めて感謝申し上げる次第である。この『泊園書院の人々』(仮題)は2021年の夏頃には刊行予定で、その出版によって泊園書院がいかになぐれた門人を数多く輩出したかを広く知らしめることとなるであろう。

その他の関連イベント

南岳の父、東咳の出身地で、南岳とゆかりの深い香川県高松市においても関連行事が開かれたのでここで紹介しておきたい。

まず、11月8日には、高松市の中條文化振興財団で南岳没後百年記念する茶会が開かれた。泊園記念会会員の河田建子氏や美澤包子氏らによるもので、文人でもあった南岳を記念するにふさわしく南岳の書も掛けられたという。河田氏を送ってくださった四国新聞にその様子が詳しく紹介されているので参照さ

れたい(『四国新聞』11月10日、写真6)。

さらに、高松市香南歴史民俗郷土館では12月11日から2021年1月11日まで企画展「藤澤南岳没後100年祭」が開催され、南岳らの書軸が展示されている(写真7および8)。香南町は東咳の師である中山城山の出身地であるところから、城山顕彰会などの協力のもとで記念展示会が開かれた。



(写真6) 四国新聞
令和2年11月10日付



(写真7) 朝日新聞(香川版)
令和3年1月6日付



(写真8) 香南歴史民俗郷土館
「藤澤南岳没後100年祭」

百年祭に関して

ところで「百年祭」とはいうが、この「祭」は festival の意味ではなく、もともと「冠婚葬祭」の「祭」すなわち亡くなった人をお祭りする意味である。

泊園書院にはそのような伝統があり、かつて昭和9年(1934)年、菅甘谷^{かんかんこく}の没後170年を記念してその祭りをを行い、書院第4代院主の黄坡が「祭甘谷先生文」を作り宣読している(新聞『泊園』新第10号)。甘谷が荻生徂徠の門人で大坂に初めて徂徠学を伝えたこと、泊園書院がその学統を継承したことはいうまでもない。

また南岳の父、東咳の没後百年にあたる昭和38年(1963)には、その故郷の香川県塩江町で「東咳先生百年祭」が開かれ、黄坡未亡人カツ、当時本学名誉教授で泊園記念会会長の石濱純太郎、本学助教授の大庭脩らが出席している。その際に地元の

東咳顕彰会が、かの「庭闌春色新 藤澤甫」の記念碑を塩江中学校校庭に建てたのであった。除幕式の際には神官の祝詞奏上に続き、玉串奉献も行われたという。もちろん東咳を祭るためである(雑誌『泊園』第3号、大庭脩記事参照)。『藤沢東咳先生 百年祭記念』のパンフレットも当地で刊行された。

そうであれば、「南岳百年祭」にあたってはまず墓参をする必要があることになろう。当初はバスツアーにより、南岳の墓所である大阪市内の齡延寺に関係者一同、連れ立って出向く計画を立てたのであったが、コロナ禍により断念せざるを得なかった。いま、機会を見て南岳先生に今回の盛事を報告しなければならぬと考えている次第である。

(以 上)

藤澤南岳先生百年祭開催される

泊園書院第二代塾主藤澤南岳先生の没後百年を記念して、各種の記念行事が催されました。百年祭に当たっては8月、学校法人関西大学池内啓三理事長・関西大学芝井敬司学長、藤澤家菩提寺齡延寺富田基弘山主、道明寺天満宮南坊城光興宮司、公益財団法人関西・大阪21世紀協会堀井良殷顧問など20名からなる発起人会が組織されました。

その後、10月22日、関西大学にて発起人会が開催され、終了後には、記念事業の一つとして関西大学総合図書館展示室で展覧中の「藤澤南岳の書と芸術」を観覧しました。引き続き23日と24日には、記念シンポジウムが開催され、23日の梅田キャンパスでは、講演に先立ち発起人の一人である国際儒学連合会福田康夫理事長のメッセージが披露されました。また二松学舎大学町泉寿郎教授らの講演と並んで、記念イベントとして関西大学吟詩部OBによる詩吟と山寺美紀子氏により古琴演奏がありました。さらに24日は千里山キャンパスに会場を移し、京都教育大学杉村邦彦名誉教授らの研究発表が行われました。

どちらの会場も新型コロナウイルス感染対策を取り、聴衆は先着80名に限定しましたが、それに代わる措置として同時オンライン配信がなされ、会場内・オンライン双方の聴衆から好評を得ることができました。

なかでも特筆すべきは、吾妻重二会長の下で泊園書院の門人調査が進展し、発起人会に合わせて『泊園書院の人々——その百五十人』が披露されたことです。南岳先生の下で泊園書院は最盛期を迎えましたが、その姿が門人列伝として明らかになったのは「南岳百年祭」にふさわしい成果と言えるでしょう。

なお、南岳先生といえば、明治45年(1912)7月に開業になった通天閣の命名者として広く知られています。23日の会場では、通天閣観光株式会社から参加者全員に対し塔乗券のプレゼントがあり、百年祭にふさわしい慶事となりました。

(泊園記念会名誉会長 藪田 貫)



祝 辞

ご挨拶

このたび関西大学は、大阪の漢学塾「泊園書院」の第2代院主であった藤澤南岳の没後百年を記念して、3日間にわたって「南岳百年祭」を実施することができました。発起人としてご賛同いただいた皆様、百年祭にご参加いただいた多くの皆様に深く感謝申し上げます。

さて、本学では泊園書院を「関西大学のもう一つの源流」と呼んでおります。ここで本学との関わりの詳細を述べる紙幅はありませんが、大学の教壇に立った藤澤黄坡と石濱純太郎、小説家として活躍した藤澤桓夫ら藤澤家の人びとと関西大学との長年にわたるつながりから、泊園書院の蔵書をはじめとする貴重なコレクションが本学に寄贈されたことが、こうした表現を生みしました。

泊園書院は、政治、経済、社会、文化の各界にわたり、広く活躍する人材を生み出してきました。これまでは、西洋の科学

技術が日本の近代を主導したと考えられがちでしたが、むしろ、漢学を基礎とする伝統に根差した深い教養が近代日本を導いたと考えることもできそうです。今回の記念事業をきっかけとした、泊園研究の更なる進展を期待いたします。

(学校法人関西大学理事長 芝井 敬司)



「南岳百年祭」開催に向けて

今年、江戸時代後期以降、大阪で隆盛を極めた漢学塾、泊園書院の第二代院主藤澤南岳の没後百年を迎えます。その子の黄鵠と黄坡、さらに石濱純太郎によって受け継がれた泊園書院は、法律学校として生まれた関西大学の、もう一つの源流として知られています。

いま大学では、国際化が叫ばれています。異文化共生を目指した社会作りの必要性が叫ばれています。異なった文化に対する理解と尊重が、現在社会の継続的な発展には必須です。

いま世界は多くの問題を抱えており、コロナ禍を含め、最近の国際情勢からも人と人の分断が伝えられています。この中で、人と人のつながりや、その結果として生まれる文化を発展させ、あるいは後世に伝えるために異文化共生の意義はますます重要になっています。時間軸を固定して、いまを見るとき、国境を越えて異なった文化を学ぶこと、国際交流の意義が増しています。

一方で、空間軸を固定して、時間軸を遡ってみましょう。大阪の地は、古くから固有の文化を培ってきました。このような、時代を超えた大阪を学ぶことも、まさに、異文化理解の実践ではないでしょうか。異文化共生社会を目指す上で、時間軸を超

えた文化の研究は重要な視点を教えてくれます。泊園書院に学ぶことは、まさに、異文化理解であり、異文化共生社会のために重要です。

100年前の大阪の地でその文化の先導者として活躍した藤澤南岳と泊園書院、それに関わる人々や様々な出来事についての研究が、現在の私たちに示唆するものは何でしょうか。その研究のますますの深化を祈念してやみません。

(関西大学学長 前田 裕)



ご挨拶

みなさん、こんにちは。福田康夫です。

この度は「南岳百年祭」の開催、まことにおめでとうございます。

さて、泊園書院という私塾について、またそれを主宰した藤澤南岳について、わたくしはこれまでほとんど知りませんでした。

しかし今回、吾妻さんから資料を送っていただき、改めてその意義の大きさを知りました。泊園書院が貴学関西大学の源流の一つであることも教えられたところです。

わたくしは現在、「国際儒学連合会理事長」および「日本アジア共同体文化協力機構理事長」を務めています。これは中国との関係が日本にとって重要であることをふまえ、その伝統思想を尊重するとともに、相互の文化的協力が日中両国ひいてはアジアの未来にとってぜひとも必要と考えてのことです。

泊園書院は漢学塾であり、中国の学問を発展させるとともに、日中の文化交流・相互理解に大きな役割を果たしてきたと思います。今回、そのような理解により発起人会のメンバーに加わらせていただきました。

この記念すべきイベントに都合により出席することができないのは残念ですが、「南岳百年祭」の開催をお祝いし、その成功を心よりお祈りする次第です。

令和2年10月23日

(国際儒学連合会理事長、日本アジア共同体文化協力機構理事長、
元首相 福田 康夫)



感謝状贈呈式

このたび、寺内俊太郎校友会長より泊園記念会に対して多大なるご寄付を頂戴しました。

前述のとおり、横山俊一郎講師を中心に調査を進めている500余名の泊園門人の略伝『泊園書院の人々（仮題）』を書物として出版するための費用として頂きました。

このご厚意に対し、記念シンポジウム当日に会場にお越しいただいた寺内氏に泊園記念会 吾妻重二会長より「感謝状」が贈呈されました。



泊園再発見の気運、讃岐で盛り上がる

「南岳百年祭」の諸行事の中で印象的だったのが、藤澤家発祥の地、高松市の児童たちが寄せた読書感想文でした。高松に住の本記念会会員、河田建子さんが東咳物語の絵本を地元の小学校48校に送って募った活動の結実で、発起人会と記念シンポジウム初日に吾妻重二会長が報告されました。河田さんの友人の美澤包子さん、岡田和恵さんらはコロナ禍の中で、南岳翁を偲ぶ茶会の開催に奔走され、地元紙に掲載されました。

4年前の東咳頌徳碑移設を機に地元で盛り上がった東咳・南岳再発見の気運。研究者のみならず、子どもたちが郷土の先哲の業績に接することを通じ、泊園書院が香川県のみならず大阪、そして全国に広く知られていくことを期待させる取り組みでした。

(泊園記念会会員、石濱家代表 松本 督)



冒頭から私事で恐縮ですが、私の曾祖父は南岳の門人でした。その関係もあり、泊園書院で祀られていた孔子像を、大成殿を建てて釋奠会を組織し、明治36年に始められました。そうした繋がりもあり、泊園関係の碑文の調査をし始めて、現在では250基ほどが確認されています。それほど石碑がある人物は全国に5人ほどではないでしょうか。明治大正時代に南岳が著名だったということがわかります。百年経った現在、南岳の名を知る人は少なくなっていました。通天閣の命名者として知られてはいますが、命名した小学校も（神戸市立）好徳小学校だけになってしまったのではないかと思います。

だからこそ「南岳百年祭」の開催は意義のあったことだと思います。区切りの年にコロナ禍であったのは残念ですが、実施

したことによって次につなげることができます。南岳さんの残したものを守りながら、今後も啓発に努めていきたいと思います。

(道明寺天満宮宮司 南坊城 光興)



高松市の小学生による藤澤東咳感想文

「南岳百年祭」に合わせて、東咳・南岳の出身地である高松市の小学生から感想文が寄せられた。安原文化の郷歴史保存会『藤澤東咳先生ものがたり』（2018年）を読んだ感想で、高松市立香西小学校の9名、高松市立川岡小学校の2名の諸君である。このためにご尽力くださった泊園記念会会員の河田建子様、

ご協力賜った香西小学校の佐藤盛子先生、前田小学校の小笠原善美先生に心より感謝申し上げます。

紙幅の関係でこのうち3名の感想文を紹介させていただく。全文は今年秋刊行の雑誌『泊園』に掲載する予定である。

藤澤東咳先生の小さいころは、体が弱く、あまり暮らしも豊かではなかったけれど東咳先生は学問が大好きで、母に字を習い、棒さで地面に字を書いて覚えていたことが分かりました。東咳先生は、そうじや手伝いをしながらも、その合間に熱心に勉強をしていたのがすごいと思いました。この話を読んで、私も勉強を熱心になりたいと思いました。三十一歳という若さで塾を作り上げたことにおどろきました。

塾に入るお金もない東咳先生は木炭を売ってしまおうと、いつも塾の外に立ってみんなが勉強している所を見て勉強をしていたことが分かりました。東咳先生は書を読むことが好きで城山先生に認められて城山先生の変わりに、講師として生徒に、教えられるようにまわっていたことがすごいと思いました。私も東咳先生のようになりたいと思いました。 川岡小学校 五年 三枝優衣

藤澤東咳は、子供のころから学問が好きで地面や石に字を書いたり、じゅくの外に立ち勉強を聞いたりしてとてもすごいと思いました。十五・十六才の時にじゅくで勉強を教えられたくらいにおどろきました。

三十二才でひらいたじゅくで千人以上もの人に勉強を教えていることからよほどすごい人だということが分かりました。

香西小学校 六年 中山美空

藤澤東咳は、九才のとき町に物を売っているときにじゅくの勉強を外から聞くだけで理解できるのがすごいと思いました。

また、東咳がじゅくの先生に教えられていろいろな勉強を学べる環境に行くことができたのが良かったと思ったり、すごいなとも思いました。

そして、東咳が、一万人の人に勉強を教えて、その人の中から地位の高い位に行く人が出て東咳はすぐれていたんだと思いました。 香西小学校 六年 中西怜央

記念シンポジウム

2020年

10月23日(金) 司会：吾妻 重二

町 泉寿郎 三島中洲と漢学塾二松学舎から見た東アジアの近代
吾妻 重二 泊園書院と藤澤南岳
横山俊一郎 泊園書院で学んだ門人たち ―その修学と業績について―
井上 孝榮 藤澤南岳と矢土錦山

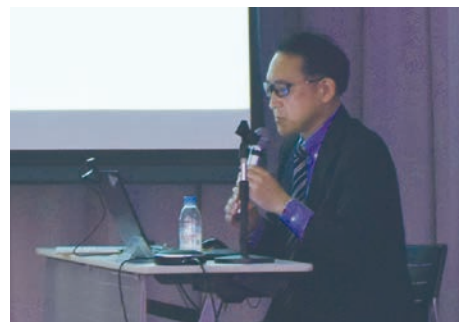
10月24日(土) 司会：二階堂善弘、吾妻重二

太田 剛 阿波・淡路における 藤澤南岳と泊園関係者との交友
吾妻 重二 藤澤南岳と宮武正策―高松の文人たち
増田 周子 戦中・戦後直後の藤澤桓夫
―雑誌『新文学』（全国書房）顧問から『文学雑誌』（三島書房）の編集へ―
長谷部 剛 藤澤南岳『和陶飲酒詩』を読む
杉村 邦彦 三原研田先生の書と書学および泊園書院

三島中洲と漢学塾二松学舎から見た東アジアの近代

パンデミックの中、十分な対策のもとに、「南岳先生百年祭」が挙行されましたことに、吾妻重二会長はじめ、関西大学関係各位に深い敬意を覚えました。ご多分にもれず、私の身の周りも万事すっかり様変わりしました。「南岳百年祭」は三月以来ほぼ初めての関西への移動となり、講演もほぼ半年ぶりでした。これまで当たり前と思っていた一つ一つが当たり前ではなかったことを思い知らされる一年でした。こんな時こそ、足下を見つめ直し、これからの歩みを確かなものにしていきたいものです。吾妻先生のご講演にもありましたように、「西の泊園、東の二松学舎」と称された明治期以来の伝統を踏まえ、今後更に研究教育に協力関係を深めていきたいと願っております。

（二松学舎大学文学部教授、東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター 町 泉寿郎）



泊園書院と藤澤南岳／藤澤南岳と宮武正策——高松の文人たち

23日には「泊園書院と藤澤南岳」と題して話をさせていただきました。一般の方々を念頭に、泊園書院や南岳につき、その歴史や業績、また泊園書院が関西大学のルーツの1つであることなどを概略紹介した。泊園書院のキャッチフレーズは一言で「東の二松、西の泊園」（二松は東京の漢学塾「二松学舎」といえること、また「幕末維新期における大阪最大、最高の学問所」であったことも強調した。

翌24日には「藤澤南岳と宮武正策——高松の文人たち」と題して発表した。南岳と赤松棕園の書軸をめぐって考察し、高松藩の奥医師で茶人でもあった宮武正策の茶室に当時の文人たちが集ったことを明らかにした。書軸の寄贈者である宮武家の方々

も来場してくださった。感謝申し上げたい。

（泊園記念会会長 吾妻 重二）



泊園書院で学んだ門人たち —その修学と業績について—

「南岳百年祭」では「泊園書院で学んだ門人たち—その修学と業績について—」と題して発表する機会を得た。まず「世に広く知られている門人」（全4名）として、陸奥宗光・松岡康毅・伊藤忠兵衛・武田長兵衛を取上げ、次に「最近の調査でその存在が明らかとなった門人」（全18名）として、実業家・政治家・教育者・医師など職業別に門人を紹介し、最後に「初めて泊園記念会にご参加いただいた方とゆかりある門人」（全8名）として、桃谷順天館創業者の桃谷政次郎、白藤学園創設者の越智宣哲、奈良県の十津川村出身者、浄國寺（大阪市阿倍野区）の住職について説明した。発表を終えて門人のご子孫の方やその関係者とお話することにより、あらためて泊園書院の伝統の重

みを感じることができた。

（関西大学非常勤講師 横山 俊一郎）



藤澤南岳と矢土錦山

「南岳百年祭」が賑やかに開催されましたことを、心よりお慶び申し上げます。

私は、先祖に当たる矢土錦山という人物が藤澤南岳先生と交友をもたせていただいたことについてお話をさせていただきましたが、私のような浅学の者に、日頃調べておりますことを発表する機会を与えていただき、厚く御礼申し上げます。また、他の諸先生方のお話を拝聴し、大きな勉強をさせていただきましたことに、感謝申し上げる次第です。

私事ながら、息子の母校である関西大学から「南岳百年祭」に当たっての御縁をいただきましたこと、感激の極みです。関西大学の藤澤家顕彰が益々発展されますようお祈り申し上げ、私自身も、今後も関西大学発信の様々な情報に接しながら、勉

強させていただく所存でございます。

（三重郷土会評議員 井上 孝榮）



阿波・淡路における藤澤南岳と 泊園関係者との交友

Zoomは大学の会議や授業で何度か経験したのですが、今回のように研究集会の形で経験したのは初めてでした。徳島から関西大学まで自家用車往復で5時間かかり、今まで金曜日実施の泊園記念会のイベントは大学の授業とぶつかって参加できませんでした。今後もZoomを併用するのであれば、授業の合間に視聴可能になり、ありがたいです。

今年度の自分の研究発表は、泊園書院の阿波・淡路での交友について調査報告をしましたが、南岳さんが書院関係者の出版物の序文や墓碑撰文、漢詩集のため、たいへん「こまめ」に漢詩文を寄せていることがわかり驚きました。しかし書院同窓生は詳細不明の方も多く、100年の時間は多くの情報を埋もれさせることを実感しました。

(四国大学文学部書道文化学科教授 太田 剛)



「南岳百年祭」を終えて―藤澤桓夫のこと―

「南岳百年祭」で藤澤桓夫の戦中・戦後の活動について報告した。発表を終えて、改めて藤澤は、実に奥深い方だと痛感した。雑誌編纂者としての力量、後輩作家達の面倒見の良さ、幅広い交友関係、探れば探るほど味わいがあり、近代文学界への貢献度も高い。常に控え目で、謙虚さも兼ね備えているからなお素晴らしい。昭和23年に『太陽』で創設された織田作之助賞でも、織田が師と仰ぎ、いつも相談する間柄だったにもかかわらず、藤澤は創設には尽力するが裏方に回り、表舞台の選考委員は、第1回目から、伊吹武彦、林芙美子、宇野浩二、阿部知二、坂口安吾らに任せている。まさに人徳者の極みである。漢学者の家系に生まれるが、藤澤は作家の道を選ぶ。だが、彼には、生涯、人を敬い慈しむ儒教の「仁」の精神が心底にあったのであろう。

(関西大学文学部教授 増田 周子)



藤澤南岳『和陶飲酒詩』を読む

南岳には『和陶飲酒詩』と題する著作がある。明治35年(1902)に刊行されたこの書は、南岳が陶淵明(365-427)「飲酒二十首」に次韻したものを収めるものであるが、そもそも陶淵明の詩に次韻することは、蘇軾(東坡, 1036-1101)に始まるものであり、南岳の『和陶飲酒詩』を読む際には、ただたんに〈陶淵明-南岳〉という両者の関係性のみを見るのではなく、〈陶淵明-蘇軾-南岳〉という三者の相互関係を見なければならない。さらに朝鮮半島の漢文学においても「和陶詩」は盛んに行われており、南岳の『和陶飲酒詩』は、それ自体は極めて小さな冊子ではあるが、実は千年以上もの歴史、東アジア漢文学という広い領域で捉えるべき作品なのである。

蘇軾も南岳もただたんに陶詩に和しただけでなく、必ず原詩の韻字を用い、しかも順番まで同じくしている。これを「次韻」といい、唱和詩のなかでも最も難しいものである。南岳はそれを二十首にわたって行っており、これだけでも南岳の詩作能力の高さがわかる。それだけではない、そもそも、陶淵明「飲酒」は、恬淡とした措辞のなかに複雑な政治批判、深遠な哲理が表現されており、それに和した南岳の詩にも陶淵明と同じような

寓意があることを読み解かなければならない。

さらに、発表者はこの書の他跋から、南岳は、長子元(黄鵠)が清国の南京に留学する際にこの詩稿を持たせ中国の文人に見せて評語を請うていたことを知った。この事実から、『和陶飲酒詩』は南岳の会心の作であったことがわかるのである。(以上、梗概)

(関西大学文学部教授 長谷部 剛)



関西大学泊園記念会主催の「藤澤南岳没後百年祭シンポジウム」に参加して

昨年(令和2年)10月22日から24日まで、関西大学で開催された上記のシンポジウムにおいて、私は発起人の一人をつとめ、「三原研田先生の書と書学および泊園書院」と題する研究発表も担当させて頂いた。コロナ禍中ではあったが、遠近の知友や同志延べ200名の参加を得て、盛会であった。

三原研田先生(1915-1996、名は静美、以下敬称略)は、昭和8年3月泊園書院に入塾し、約10年にわたって藤澤黄坡・石濱純太郎両氏に師事して漢学を修め、その間に新聞『泊園』の編集同人として協力した。のち、滋賀大学教授となり、書と書学を担当した。書は、小野鍾山、辻本史邑、赤羽雲庭らに師事して、関西美術展、日展などにて特選を受賞し、中国書法史の研究でも秀れた論著を遺した。私は京都大学文学部東洋史学専攻の2回生の時から師事し、主として書の実技を学んだが、書学の方面でも啓示と学恩を賜った。

今回の私の発表では、研田の主著『研田書記』、『研田家語』、『研田不枯』を初め、未完の稿本『研田遺稿 一楷書の眺め—』

(仮称)や新聞『泊園』などを活用して、その書と書学および泊園書院との関連などについて考察を加えた。

(京都教育大学名誉教授・書論研究会会長 杉村 邦彦)



記念イベント「古琴演奏」

このたび「南岳百年祭」では、古琴の演奏をオンラインでさせて頂きました。古琴（元来「琴」と称し「七弦琴」とも呼ばれる）とは、中国の紀元前から知識人の必須の教養として今日まで伝承されてきた楽器です。かつて泊園書院でも奏されていました。今回は、古琴について紹介し、代表的な古琴曲「流水」を演奏した後、泊園書院で奏されていた琴歌三曲を、泊園文庫に残る楽譜から再現演奏しました。詳しくは、藤澤東畝の琴師鳥海雪堂の手写本に基づく「漁樵問答」、文政十年刊『琴譜』三巻の東畝手沢本所収譜に拠る「三才引」、東畝自筆稿本『（東畝文稿）』第八冊収載の東畝自筆譜に基づく「帰去来辞」です。そのほか、泊園書院とその周辺で古琴を嗜んだ人々についても、簡単に紹介致しました。

（関西大学東西学術研究所非常勤研究員 山寺 美紀子）



記念イベント「詩吟」

今回の「南岳百年祭」では関西大学吟詩部OBの方々による詩吟の吟詠が行われた。

関西大学吟詩部は、昭和8年（1933）、泊園書院の第4代院長主であり本学教授であった藤澤黄坡の指導により創部。初代顧問は黄坡がつとめ「吟詩部部詩」（漢文）も黄坡が作った。



今回は「南岳百年祭」を記念してOBおよび関西吟詩文化協会の方々にお越しいただき、会場において生で吟詠を聴くことができる貴重な場となった。

編 | 集 | 後 | 記

文化交渉学ニューズレター増刊号をお届けします。昨年10月に開かれた「南岳百年祭」が文化交渉学（ICIS）研究班のうちの「東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班」に関連することから、増刊号の発刊により一連の行事をより広く知っていただくと考えた次第です。

行事開催にあたっては本学の全面的協力はもちろん、元首相の福田康夫様ほか多くの方々からご支援、ご協力を頂戴しました。東畝・南岳の故郷高松市にあつては河田建子会員が奔走してくださいました。コロナ禍の中での開催にもかかわらず、お蔭様で記念すべきイベントとなりました。この場をお借りして御礼申し上げます。次第です。

（編集者）



発行：関西大学文化交渉学研究拠点
(Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL：06-6368-0653 FAX：06-6339-7721
E-mail：touzaiken@ml.kandai.jp
URL www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/

発行日：2021年（令和3年）2月